

現在我が国における幼稚園カリキュラム評価の問題点と対策案

一. わが国の幼稚園カリキュラム評価の問題点

1. カリキュラム評価は幼稚園の生活と離れ、実際の幼児の発達状況を反映できない。
2. 評価の結果だけを追求し、活動自体や教授活動が幼児の発達上に与えられた影響の面に関する評価が重視していない。
3. カリキュラム評価が「完璧な人間」（「完人」と略する）式の評価を主張し、人間の発達の差異性を無視し、終身教育の考え方とも一致していない。

* 「完人教育」：

- ①児童に共通の知識や物事を理解する方法を教える。
 - ②理性的な人間、自分の生活の設計者、調和的完璧な人間になれるように児童を育てる。
 - ③様々な技術を勉強させる
 - ④学生の本質を十分に発揮させ、完璧な人間を育てる。
 - ⑤学生の自己実現を通して完人教育をする。
4. カリキュラム評価の対象が単一化され、カリキュラムというのは「幼稚園の中のカリキュラム」に限られている。
 - *環境づくりに力を入れる
 - *親参加や地域協力など
 5. 教師と幼児はカリキュラム評価の主体ではなく、客体になっているのが現状である。

二. 対策案—ダイナミックな評価と発展性があるカリキュラムの評価観

1. カリキュラムの目標はカリキュラムの実践中に形成するため、ダイナミックな評価が必要である。
 - *目標達成評価が無意味且つ不可能な評価である。
 - *異なる民族、異なる地域それぞれの評価標準を作成する必要がある。
 - *児童観、教育観、価値観を常に更新する必要がある。
 - *評価は実際の背景や場面と結びつけることである。
2. 「生活」の視点から出発し、発展的な評価が必要である。

幼稚園教育評価の主体の発展傾向について

一. 評価主体の多元化

*伝統的な評価主体：管理者

*新しい『幼稚園評価指導要領』による評価主体：管理人員、教師、幼児、親及び幼稚園の教育評価に全ての参加者である。

*多元化評価の良さ：

- ①社会各方面からたくさんの情報をもらえ、全面的、客観的、科学的である。
- ②幼児教育と社会との協同関係を促進できる。

二. 自己評価を重視する

*新しい『幼稚園評価指導要領』における自評の位置づけ：幼稚園評価が教師の自評を中心とし、園長、管理人員、他の教師たちが協同で行うこと。

*自評の良さ：

- ①一つの自己認識、自己監督、自己発展のメカニズムの構築
- ②自評者の自信心と責任感を向上する
- ③自評者の積極性、自発性、創造性を促す

三. 評価主体の相互作用化

*新しい『幼稚園評価指導要領』では：評価の過程が各方面の協同参加、相互支持と相互連携の過程である。

*評価の結果だけに注目するのではなく、民主的に、協同的な関係作りが必要である。

*一人ひとりの教師を尊重することが前提である。

この間の6年間我が国の幼稚園教育評価研究の文献総括

一. 幼稚園教育評価の対象に関する研究分析

1. 幼児評価

*種類：①幼児の発達状況に関する正式な評価

②教師が日常の教育実践におけるその場、その時、その場面における非正式な評価

*正式な評価（伝統的）：①評価の内容単一、知識や技術を主とする。

②評価の標準が同じく、一元的、同じ尺度で児童を要求する。

③方法が量的な評価を中心とする

*非正式な評価：①研究の対象が具体的

②方法が具体的、操作しやすい

③長期的な視点での幼児の発達の理念

④問題解決を通して幼児の自尊心や自信心を育む

⑤縦断的な評価を無視する

2. 教師評価

*種類：①行政的評価

②発展的評価

*行政的評価：優秀教師と失格教師

*発展的評価：教授活動の足りない所と改善法に注目

*問題点：①教師が受評者として自分の意見を述べる機会が少ない。

②評価の結果は優秀教師の評定やボーナスの授与と関連があるので、授業実践の改善に関する評価が少ない。

③焦点を当てる具体的な評価が少ない。

3. 幼児教育機関の質に関する評価

*評価表：①アメリカのNAEYCのHarms/Clifford環境評価表が我が国に大きな評価を与えた。

②人員の素質標準、職責標準、効率標準、効果標準

*問題点：①評価の標準が大まかであり、実行しにくい。

②園の全体的な評価を重視するが、クラスの具体的な授業に関する評価が重視していない。

③園の施設に関する評価する時に、「何がある」だけを羅列するだけで、実際に何が必要な施設かが重視していない。

④評価実践に助言やアドバイスくれる機関がない。

⑤親の参加がまだ表面的である。

二. 幼稚園教育評価の要素に関する研究

1. 評価の目的から：
 - ①優良程度の判断を目的とする評価
 - ②教育の質を把握し、教育活動を促す評価
2. 評価の内容から：
 - ①過程評価（計画、過程、効果）
 - ②ある方面の評価（園長、教師、環境）
 - ③問題点：
 - *評価の範囲のバランスをとれない（幼児だけ注目する）。
 - *幼稚園環境、幼児個体の発達などを対象とするが、幼児教育の改革、幼児教育に関する理論的研究、機関の構造などの面では真っ白の状態である。
 - *発達の状態、発達の潜在力、発達の傾向に関する研究が少ない。
3. 評価の方法から
 - *目標方向付けのモデル：
目標を解釈する—目標を改善する—指標を定義する—権力関係を決まる—評価作成
 - *方法：結果的评价、第三者評価、量的評価
4. 評価の主体から：
 - *管理者や経営者の評価
 - *政府機関の評価

この間の20年間我が国の幼稚園教育評価研究の文献総括

キーワード：幼児発達評価 幼児教育活動の評価 幼児教育の質の評価

一. 幼児発達の評価研究に関する問題点

1. 評価内容の単一と一面性

*評価は行為が目標に達成するかどうかを重視するので、幼児行為を通して幼児の動機や努力程度を無視する。

2. 評価標準の一元化と方向付け

*クラス全体として優、良、可、差などの区別に分け、個人差を無視する。

3. 評価方式が数量化、「惟理性」

*量的・量化・統計の評価に限られている。

*評価が教師を対象とする。

*課題：評価内容（評価指標）、評価方法、実施手順、評価と実践の結びつけ

*具体的に：

- ①幼児発達評価の真実性、生活性に向ける
- ②幼児発達評価が幼児の問題解決に関するダイナミックな過程に注目する。
- ③幼児発達評価の多元性に向ける。
- ④幼児発達評価が小グループを利用して教授活動を展開する。
- ⑤幼児発達評価の方式が描述的（具体的）な評価を主とする。
- ⑥幼児発達評価の評価結果が実践に関する応用に注目する。

二. 幼児教師の教育活動の評価に関する問題点

1. 技術を追求する傾向がある。

2. 見える成果だけを評価する。

3. 評価が簡単且つ功利、評価の結果は優秀教師の評定やボーナスの授与するために使う。

三. 幼稚園や保育園などの機関の教育の質に関する評価

1. 評価標準：「幼児教育機関の教育の質に関する評価表」

2. 教師の質：

①2000年より教師免許制度を設立。

②私立幼稚園や民営幼稚園と公立幼稚園の教師の質が玉石混交である。

3. そのほか問題点

①評価の標準が大まかであり、実行しにくい。

②園の全体的な評価を重視するが、クラスの具体的な授業に関する評価が重視していない。

③園の施設に関する評価する時に、「何がある」だけを羅列するだけで、実際に何が必要な施設かが重視していない。

④評価実践に助言やアドバイスくれる機関がない。

⑤親の参加がまだ表面的である。

On Assessment of Preschool Education Quality

キーワード: assessment; preschool education quality; problems; countermeasures

一. 現在我が国の幼稚園教育の質の評価実践の問題点

1. 評価の内容、標準自身の問題点

- ① 幼児の絶対発達レベルを標準として教師の教授レベルや幼稚園の教育の質を評価する。
- ② 条件や結果的な評価を重視し、過程的な評価を重視していない。
- ③ 幼稚園の等級分別化に関する評価標準の内容や構造の面などが完備していない。
- ④ 評価の指標が大まかで、操作しにくい。

2. 評価する時に、管理、物的、人員の調整などを重視するが、その役割をどのぐらい発揮しているのかあまり見ていない。

3. 評価方式に関しては、量的な評価だけを追及し、量的な評価と質的な評価の整合性は見えていない

4. 評価主体が単一化—評価は評価側から輸出するが、評価を受ける側が認めるかどうかが見えていない。

5. 評価の信頼度や効率度などの指導やサポートが足りない。

二. 今我が国の幼稚園教育の質に関する評価実践の調整や対策

1. 幼稚園の等級分別化に関する評価の内容、標準

- ① 幼児の発達を評価する時に、「増価値」の概念の導入
 - ② 教授活動を評価する目標をあらかじめ検討しなければいけない
 - ③ 幼稚園の等級分別に関する評価標準の内容や構造をあらかじめ調整する必要がある。
 - ④ 評価の標準がその場で起こる事実と結びつける必要がある。
2. 量的評価と質的評価を結びつきながら、幼稚園の発展の方向を描き出す。
 3. 評価の主体の「多元化」への変化。
 4. 評価の信頼度と効率度に関する指導やサポートを提供する。

On the Application of Portfolio Assessment in kindergarten

キーワード：portfolio assessment; kindergarten; children's works

本文

一. ポートフォリオ評価を实践する時の問題点と提案

1. 結果を重視するが過程を無視する傾向がある

①具体的な表現

* ポートフォリオを作成するために一部の教師が比較的の良い作品や完成した作品だけを展示するので、最終的な成果を評価することになってしまう。

* 幼児の最優秀だけの作品を揃えるので、次への目標を設定できなくなる。

* 評価は実際にスタートラインじゃなく、終点になってしまう。

②提案

* 幼児の発達状況の事実を反映できる全てのデータを入れる必要がある

* 例えば：幼児の各発達段階の作品（絵・ピクチャ・教師の記録・親のアドバイスなど）

2. 幼児の作品を選択する時に盲目性がある

①具体的な表現

* 一部の幼稚園では幼児なら何でもポートフォリオの中に入れる

* 作品がいっぱいあるが、意味ないものばかりである

②提案

* 幼児が教授活動を準備するためのデータを選択する

* 段階的に探索結果を表せる作品を選択する

* 最終的な作品を選択する

3. 幼児の作品に関する必要な説明が足りない

①表現：幼児の作品に関する教師の記録や情報がない

②提案

* 写真や作品などを一枚の紙に貼る

* 横に幼児の名前・年齢・作成年月日・教師の記録（作品の背景・過程・幼児のやる気・コメント）

4. 評価する時に全面的ではない

①評価過程：ぼんやり等級評価+観察記録+評価の方式

②実際に以上の3つの部分の評価が全部揃えている幼稚園が少なかった

③提案：

* 幼児の探求性学習をぼんやり等級評価表（以下）

評価指標	できる	ほぼできる	できない
探求に関する興味が非常に高い			
積極的活動に参加する			
自分にとって上達しやすい分野がある			
聞くことが好き、物事に興味津々			
大人の援助によって自ら思考や操作、答を探す			
新たな方法で操作・探索・表現する			
はっきり自分の気づきや考えを言える			
比較的に高いレベルの操作や探索能力を示す			
失敗に負けず、探索や思考を楽しむ			
親と自分を考えを交流する			

- * 観察記録を書く時に細かい言葉で表現する、事例も挙げる。
- * コメントも細かい描述性のある言葉で表すこと。(例えば、「何故」、「どこ」、幼児のつぶやきや表情)

記録データによる評価——ある新たな幼稚園教育評価方法について

本文

一. ポートフォリオ評価とは

1. 20世紀80年代にアメリカの中小学校における教育実践方法の一つである。
2. 今我が国の基礎教育分野では大変注目されている。
3. ポートフォリオは「代表作の選択集」の意味であり、教育に応用する場合は、児童が学習過程における代表的な作品や典型的な記録を収集し、児童の現実表現を児童の学習の質を判断する手段とする。
4. 一人ひとりの児童を大事にするのが基本である。

二. ポートフォリオ評価の基本理念

1. カリキュラム・教授・評価の3つの要素が一つの循環的、ダイナミックなモデルになる。
2. 評価自体が教授活動の一部になり、時間的、空間的に日常の教授活動と繋がっている。
3. 児童が知識を通して発達できるのが目的である。
4. 児童は評価における重要な主体である。

三. ポートフォリオ評価を応用する時の注意点

1. ポートフォリオ評価の目的

- * 児童の各方面の成長過程を記録する。
- * 児童のある方面における発達レベルや状況を示す。
- * 教師が児童の発達状況を把握できる。
- * カリキュラムの設計に必要な情報を提供する。
- * 教師の教授活動を示す。
- * 教師の授業の準備を評価する。
- * 親とのコミュニケーションを促進する。

2. ポートフォリオ評価の内容

- * 幼稚園における児童の作品（絵・泥人形・折り紙・数学宿題）
- * 活動中の写真やビデオ
- * 幼児の自己評価のような記録、ビデオ、表現など
- * 児童の身体・知能・操作能力・言語・認知・芸術活動などの各方面を表現できるデータ。

3. ポートフォリオ評価の標準：アメリカのコウブプログラム

4. ポートフォリオ評価の結果

- * 等級や数字で幼児の発達段階を示す
- * 細かい記録で児童発達の特徴、傾向や速さなどを文字で表現する

5. ポートフォリオ評価の意義

1. 真実・全面的・ダイナミックに児童を評価し、児童が発達の全ての情報を揃える。
2. 児童に成功の楽しさを体験させ、自己評価や自己反省する能力を高める。
3. 教師の教授設計の根拠を提供する。
4. 幼稚園と親との交流・相互作用を促進する。

幼児のポートフォリオ評価に関する価値分析

本文

一. ポートフォリオ評価は幼児を評価の主体とし、幼児の主体性を発揮することを促進できる。

1. 評価の要素：評価目標、標準、方式、手順。
2. 評価者と被評価者との関係が平等である。
3. 児童の自評の部分は比較的に重要である。
4. 評価する時に児童を中心とする。

二. ポートフォリオ評価を通して児童が自分を知り、自信が生まれるようになる。

1. ポートフォリオの中に入れるのが幼児の作品だけではなく、幼児の学習戦略・学習意欲・学習過程なども含める。
2. 教師が児童に「なぜこの作品を選択しますか」、「どうしてこの作品が好きですか」、「自分が納得できないのかどれ」、「どうやって改善しますか」などのような質問にする。
3. 成功の楽しさを感じさせる。

三. ポートフォリオ評価が教師の反省を促進し、教授活動を向上できる。

1. ポートフォリオ評価は教師に反省のチャンスを与える。
2. データ収集する時に教師が誰、何、どこ、いつ、なぜ、どうやってなどの質問をする。
3. 評価の目的が証明するためではなく、改善するためである。

四. ポートフォリオ評価は幼児の個人差を注目し、教師が全ての幼児の発達状況を把握することを促進する。

1. どの作品を選択する権利が幼児の手にある。
2. 作品はどのような形で展示することも児童によって決定する。
3. 教師が児童の作品を収集する時にも様々で方式で行う。
4. 展示する時にも幼児の個人差によって、それぞれの得意分野、幼児が好きな方式で展示する。

五. ポートフォリオ評価は親の関心を呼びかけ、幼稚園と親との相互作用も促進できる。

1. 親が自分の子どもの本当の発達状態を把握できる。
2. 親が自分の子どもを見直すチャンスを与える。
3. 親が幼稚園教育に積極的に参加できる。
4. 親からアドバイスをもらえるようになる。

台湾における保育の質の研究動向に関する研究

分担研究者 芦田 宏 兵庫県立大学環境人間学部教授

本研究は、台湾における保育の質に関する資料を収集し、現状とともに研究動向を学ぼうとするものである。10編の論文を収集したが、台湾ではすでに1984年から幼稚園の園評価が行われており、現行の評価システムをいかに有効に改善していくかという視点での研究論文が多く、またそのシステムへ積極的に参加していくような園長の役割や、政府の援助の必要性が主張されていた。

A. 研究目的

本研究は、台湾における保育の質に関する資料を収集し、現状とともに研究動向を学ぼうとするものである。

B. 研究方法

10編の論文を収集した。これをもとに、現在の台湾において、保育の質に関して課題となっている点を分析する。

（資料の収集に当たっては SHING Marn-Ling 教授(台北市立教育大学)、収集した文献の翻訳に関しては閻弘鈺さん(東京大学大学院)の協力を得た。）

C. 研究結果

台湾ではすでに1984年から幼稚園の園評価が行われており、託児所(保育所)においても同様の評価システムが導入されている。したがって、研究動向も評価システムに関するものが一番多くなっている。現在行われて評価システムは、「行政面」「環境面」「保育内容面」の観点から、園の運営をそれぞれ専門評価者が評価を行い、それぞれの面で優秀な園には報償金が支給される制度になっている。しかし、評価を受けることは義務ではなく、園の方から主体的に評価を受けているとは言い難い状況があるようである。また、評価内容・方法についても、外的な評価になっており、カリキュラム等の園による独自性を評価するまでに至っていないこと、また評価者の主観に左右される部分があることを指摘している。し

たがって、評定的な評価に陥っており、形成的な評価の必要性が言われている。そのようなことから、外的な環境評価だけではなく、内的な保育実践までを含んだ多面的な評価尺度が必要であるという主張につながる。

一方で、園の保育の質を向上させるキーパーソンは園長であるという主張は、たとえ公立であっても人事異動がないシステムを取っているが故に、園の物、人の配置に大きな影響力を持つ園長がリーダーシップを発揮することを求めている。ただ、そのためには、園長としての職責について研修できる機会が必要であり、現行の保育者養成課程や保育者としての現職研修とは異なった、園長研修の必要も指摘されている。

台湾は地域によって、幼稚園や保育所の実態が異なり、全地域に同じ内容の保育や園運営、そして評価システムを当てはめることはできないが、評価システムによって各園に保育の質の向上への意識をもたらすことができるので、評価システムを円滑に行うことができるような補助金の必要も主張されている。

D. 結論

このように、台湾では、現行の評価システムをいかに有効に改善していくかという視点での研究論文が多く、またそのシステムへ積極的に参加していくような園長の役割や、政府の援助の必要性が言われているといえる。

<資料1>

台北市 2000 年度

公私立幼稚園教育評価報告書

主催者側：台北市政府教育局

引き受け側：台北市松山区健康國小

序章

蘇愛秋 園長

I. 前書き

2000 年度の幼稚園評価を行う背景：

* 政策面：「課程評価」（1975 年 12 月）→幼稚教育法（1981 年）→幼稚教育実施細則（1983）

* 幼稚園現場の現状：関連政策の実施は教師や園によってそれぞれである、教師が親達の喜ぶ顔や満足度を考慮せざるを得ず、早めに幼児に漢字を書くなどの練習をさせるため、幼児の目や背中など、発達上における悪い影響をもたらしている。

* 幼稚園評価：台北市初めての幼稚園評価（1984 年）
最初の不意打ちの点検→CIPP モデルへの転換

一. 幼稚園の評価の意義：筆者によると、幼児教育は人間の一生の発達に計り知れない影響がある。そういう意味での幼稚園の評価は幼児教育の質を向上するために行い、幼児の人格を尊重し、立派な人格を育む上で大きな役割を果たしている。

二. 評価の目的：

1. 目的：ある事実は正しいかどうかを判断するのではなく、幼稚園の現状を把握し、実践上の問題を気づき、教育の質を向上するためである。従って、評価委員たちが問題を発見する他、客観的な判断や実行できるアドバイスを提供する必要もある。一方、評価も親たちが子どもをどこの幼稚園へ送り届ける参考になれる。

2. 園長たちが評価委員に関する苦情

①幼稚園側（園長）が評価には当惑している：評価委員自身の好き嫌いによって判断することや実行できないアドバイスを提供することなど。

②評価委員が私立幼稚園の教員となるべき人材が整っていない指摘に対して、私立園長は、その原因が経済的な原因で教師たちが公立への移動が多いと述べる。

- ③評価を行う時間を増やすべき。
- ④そのまま評価ハンドブックによって評価し、個性を無視、柔軟性がない
- ⑤評価委員たちの専門性に疑問
- ⑥評価委員たちの公平性に疑問

II. 今年度台北市幼稚園の評価の特色

- 一、評価を受けた幼稚園が今までで最も多い
- 二、評価委員グループは3人から2人で1つのグループをつくられるになっている。
- 三、「成長奨」(優秀幼稚園)をもらえる幼稚園の名簿を作成するが発表しなくなる。
- 四、初めて実践者が評価の報告書を書く。
- 五、公立と私立幼稚園発展上の差異を重視する。
- 六、今年度評価内容に関する大幅な訂正をした。

III. 優秀幼稚園の評価・選択の原則 (1999年度修正版)

一、「幼稚園の業務と行政」

- 1. 設立のねらいは教育原理と一致し、目標は具体的確実であること。
- 2. 園長が優秀教師であり、優れた経営理念を持つ、行政業務の処理を十分に幼稚園の利益を念頭に置くこと。(修正)
- 3. 園長が専門知識やリーダーシップを持つこと。(部分修正)
- 4. 見通しがきく計画を立て、確実に行うこと。(部分修正)
- 5. 教授の資源を分類し、有効に使うこと。
- 6. 弱いものや発達障害児に適切な配慮すること。
- 7. 関連ある規定によって幼児保険を行うこと。
- 8. 全ての教師が合格教師であり、教師と子どもの比率が1:15以内であること。
- 9. 全ての教職員が必ず公共保険、或は労働保険、或は全民保険にはいること。
- 10. 全ての幼稚園の職員が労働基準法によって幼稚園(学校)と労働契約を結ぶこと。
- 11. 各経費が関連規定によって使い、特別支出金はその項目にのみ使用すること。(増加項目)
- 12. 市民と結び付き、うまく社会的な資源を利用すること。(増加項目)

二、「環境と設備」

- 1. 飲用水が三ヶ月ごとに環境保護局或は指定機関の検査を受けること。
- 2. 電気設備が毎年電力会社や専門人員の検査を受けること。
- 3. 消防安検申告認定書や消火器設備や置く安全を完備すること。
- 4. 全ての教職員が消火器をうまく使い、定期的に教師や子どもに安全訓練を行うこと。

5. 料理人が毎年健康診断を行い、食事をする時に適切な衣服を着ること。
6. 建築物の公共安全検査を申告すること。(増加項目)
7. 室内外の幼児活動面積が基本規定を達すること。(増加項目)
8. 教育部の「幼稚園の公共安全に関する管理ハンドブック」によって、定期的に検査を行うこと。(増加項目)
9. 高温殺菌設備を持つこと。(増加項目)
10. 活動の照明度が350Lux以上に達すること。(増加項目)

三. 「教授と保育」(ほとんど修正)

1. 自らカリキュラムを設定し、テキストを作る：自分の特色を発揮すること。
2. 教授が主題と結びつき、清潔、開かれた学ぶ環境を提供し、多様化、段階的な教授を行うこと。
3. 教師と幼児と共に活動を設計し、幼児作品を中心とする。
4. 教授活動の全体図を重視すること。
5. 個々の幼児に自ら学ぶ機会を与える
6. 教師の教授反省や実践記録を重視すること。
7. 教師は幼児が「学ぶ」への参加を導き、発見的な教授法や開かれた方式で幼児とやり取りをする。
8. 保護者教育を重視し、保護者たちが幼稚園実践や教授活動に参加できるチャンスを提供する。
9. 教師自身の成長を重視し、研修や同僚間の研究討論会を提供する。
10. 幼児を自分のことが自分でできるように育む。
11. 団地の情報を提供、団地の活動に参加できるチャンスを提供する。
12. 特別児に特別教授案を立てる。
13. 園側の特別な要求に応じて対策を立てる。

IV. 台北市政府教育局 1999 年度公私立幼稚園の評価の流れ(3つ)

- * 1998 年度評価検討を行う(1999 年 7 月 13 日)→評価ハンドブックを修正する(1999 年 10 月 18~22 日)→評価説明会を行う(10 月 25 日~30 日)→園内自己評価グループを作り、検討する(11 月 1 日~11 月 15 日)→基本資料や自己評価資料を書き込む(11 月 16 日~11 月 29 日)→自己評価資料の提出(11 月 30 日まで)

- * 評価を受ける幼稚園を選択する：指定評価
(9 月 15 日~10 月 10 日) 申請評価
 抽出評価

- * 評価委員会が成立する（10月16日）→評価委員検討会（10月18日～22日）→評価委員準備会議（11月30日）→一回目の訪問（12月1日～1月31日）→二回目の訪問（2000年5月末まで）→優秀園を指名（9月初）→再び訪問（11月末まで）→優秀園の審査会議（12月初）→評価報告を作成（11月1月～12月31日）→優秀園に奨励を授与する（2009年8月初?）

V. 評価を受けた幼稚園

評価類型	推薦評価	指定評価	申請評価	抽出評価	合計
公立幼稚園	15	13	0	11	39
私立幼稚園	29	32	1	17	68
合計	44	45	1	28	118

VI. 「教授と保育」の評価結果分析

表. 教授と保育の評価項目と標準（盧明 教授）

一. カリキュラムと教授活動

1. カリキュラムの設定：①幼児発達理念、②実践と結ぶつき、③全体としてつながりがあり、④幼児の興味や発達上の要求に応じて設定する

2. 教授活動：

①学習情景と資源：

- i. 教授活動をする時に使用する材料が感覚でき、実物であり、操作しやすいもの
- ii. 活動空間の設計や飾り付けなどが柔らかく、穏やかであり、教師が幼児の活動をはっきり見える。
- iii. 教師と子どもが活動の主題によって活動空間を設計する
- iv. 学習空間が団体、グループ、個人（学習区、コーナー、自由活動）などの多様な形に応じて、絶えず変化する。
- v. 道具、玩具、材料など多様の、難易度が幼児の発達段階によって違う。
- vi. 道具、玩具、材料、絵本など高さが低い場所に置き、幼児がいつでも自由に取れる。
- vii. 園側は教授用設備、絵本、或は視聴器材を置く固有な場所があり、はっきり分類する。

②活動方式

- i. 日課は動的活動と静的活動のバランスがとれ、教科によって活動を行うのでは

なく、状況によって全体的、柔軟的に調整する。

- ii. 活動が全体、グループ或はコーナーなど多様な形によって構成される。
- iii. 活動の進行がカリキュラムによって、柔軟的に行う。
- iv. 各活動とのつながりや転換することが自然に行う。
- v. 幼児に十分に参加できる時間を与え、幼児たちが自分の力やスペースで活動を行う。
- vi. 幼児が楽しく活動を行う。
- vii. 同じ学級を担当する教師同士が互いにサポート、協力し合う。
- viii. 特別支援を必要とする幼児に柔軟的な教授を行う。

3. 教師と幼児のやり取り：

- ①教師が適切な身体言語を使い、自然に幼児と接する
- ②教師が積極的な姿勢をとり、幼児を尊重する
- ③教師が開かれた言語や戦略を使い、幼児とのやり取りをする
- ④幼児同士の共有や、ぶつかりがある時に、正面的な方式で自ら解決することを促す。
- ⑤幼児の突然状況（嘔吐、物品を壊すなど）を受け入れ、適切且つ直ちに対応をする。

4. 評定：

- ①教師が毎日の教授活動の実際の状況、学級の反応及び学習の状況などを記録、検討する。
- ②園側が定期的に教授検討会を開き、会議記録をとる。
- ③教師が普段に幼児の個人作品や他人の協同作品を収集する。
- ④教師が学期の始まりや終わりに、平常の観察記録を整理し、幼児の学習を評定し、幼児の成長のプロセスを把握する。
- ⑤教師が特別な要求がある幼児の反応や学習状況に関する記録を持つ。

二. 保護者とのやり取り

- 1. 園側が保護者と常に電話や口頭或は連絡帳などで交流する
- 2. 園側が定期的に保護者との懇談会を開く。
- 3. 園側が定期的に書面の情報を提供する。
- 4. 保護者が幼稚園の各種の活動に参加できるチャンスを提供する。
- 5. 地方の人的、物的資源（例えば、公園、学校、図書館、消防隊、劇団など）を利用する。
- 6. 団地の資源を共有する。

三. 健康安全

1. 食事：

- ①栄養のバランスがとれ、味があっさりし、刺激性の食物（例えば、紅茶、ミルク茶、コーラ、辛いものなど）を避ける。
- ②提供方式が衛生的である。
- ③食物が多様化、味が多い、幼児の好みを配慮する
- ④主に自炊、時にはインスタント食品を補助する

2. 安全

- ①カリキュラムの内容が安全教育である。
- ②校外教授が規定通りに管理する。
- ③教師が常に幼児の安全状況を確認する。
- ④教師が各意外事故の応急手当に熟練する。
- ⑤いじめられそうな幼児を報告する。

四. 教師研修

1. 園側と教師が共に教師や幼稚園の需要を討論し、教師研修活動を開く
2. 園側が教師研究の関連資料を提供し、教師の要望や関心に応じて教師参加を促し、必要な時に手当てを与える。
3. 教師研修進歩活動が毎学期に少なくとも一回を開く。
4. 園内の教師がそれぞれ毎年、少なくとも 18 時間以上の研修活動に参加する。
5. 定期的に園内研修会を開き、会議記録をする。

VII. 総括とアドバイス

壱. 評価結果

一. 成績優秀な幼稚園

表 1

優秀項目	公立幼稚園数	私立幼稚園数	合計
業務と行政	29 (74.36%)	8 (21.5%)	37 (31.36%)
環境と設備	27 (69.23%)	17 (21.52%)	44 (37.29%)
教授と保育	6 (15.38%)	2 (2.53%)	8 (6.78%)
評価を受けた園数	39	79	

表 2

優秀項目園の数	三つの項目が全て優秀を得る	二つの項目の優秀を得る	一つの項目の優秀を得る	合計
公立	5	21	5	32 (31%)

私立	1	5	14	20
合計	6	26	19	51

二. 成長獎を得た幼稚園

成長獎 項目	公立幼稚園（数）	私立幼稚園（数）
業務と行政	5	7
環境と設備	3	12
教授と保育	4	12
合計	8	23

注：3つの項目の成長獎を重ねて得た幼稚園がある（合計）

幼稚園の質評価：内部方向付けから外部方向付けへ

一. 前書き

幼稚園評価の目的は幼稚園の教育の質を保つことである。高い質を持つ幼稚園は幼児の発達に大きな役割を果たしている。従って、幼稚園の質の評価に関する研究は幼児教育の理論と実践を結びつける重要な課題としている。

本論文はまず、幼児教育の質の概念を検討する。幼児教育の質は一つの幼児教育のプロセスを中心として多段階的な概念であり、幼児教育のプロセスの質、教室の質、そして、幼稚園の質と幼児教育体制の質などに触れ、範囲も徐々に広がっている。

また、アメリカでよく使われている 6 つの幼稚園の質評価の手段を検討する。これらの評価手段によって内外方向付けに分け、比較しながら分析を行う。最後に、以上の視点から台北市における幼児教育評価実施の可能性を論じたい。

二. 幼稚園の質

1. 幼児教育に影響する要素：

①Cryer,Tietze,Burchinal,Leal,Palacios(1999)は、Bronfenbrenner 生態系統論を通して幼児教育の質に影響される各段階 (spheres of influence) を分析した。彼らによると、幼児教育システムにおいて中心となっているのは幼児教育のプロセスであり、各方面へ影響している。各影響面とは教室、幼稚園、団地 (地方)、国家であり、しかも範囲が徐々に広がっている。

②以上の視点により、幼児教育は、幼児教育のプロセスの質、教室の質、そして、幼稚園の質と幼児教育体制の質などに関係し、範囲も徐々に広がっていると指摘している (Essa and Burnham,2001,徐,白,2003)。

2. 幼稚園の質

①Phillips と Howes (1987) は、幼児教育の質をプロセスの質と構造の質に分け、その後の研究もほぼ彼らの視点によって行われている。

②Helburn と Howes (1996) は、幼稚園における大人の仕事環境の質も幼児教育の質の概念に入れた。

① プロセスの質：アメリカの幼児教育学者たちの「子ども中心」の教育理念を反映する。具体的には、プロセスの質は幼児が経験した教育の質であり、主に教師と幼児の関係、教師の姿勢、学習活動などを指す。

④構造の質：教室における「階級」関係の構造であり、プロセスの質の背景枠組みを提供し、